

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

藤原宇合「悲不遇」詩の論：藤原宇合の賢者論

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2023-02-05 キーワード: 作成者: 土佐, 朋子, Tosa, Tomoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000047

藤原宇合「悲不遇」詩の論

— 藤原宇合の賢者論 —

土佐朋子

悲不遇 一首

藤原宇合

賢者悽年暮 明君翼日新 周日載逸老 殷夢得伊人

搏拳非同翼 相忘不異鱗 南冠勞楚奏 北節倦胡塵

学類東方朔 年餘朱買臣 二毛雖已富 万卷徒然貧

(『懷風藻』九一)

一、はじめに

右は、『懷風藻』所収の藤原宇合「悲不遇」詩である。

従来は、遣唐副使、常陸守、持節大將軍、西海道節度使な

ど、都から遠く離れた地での職務の連続であった宇合自身の不遇感を表明した作品として解釈される傾向にある。その一方で、不遇であり貧であることへの嘆きを、高位高官にあった宇合のものとする事への疑問も持たれ、倭判官など他人の不遇感の代弁ではないかという考え(林古溪『懷風藻新註』)も出されており、解釈は定まっていない。また、第三句から第一〇句にわたる典故をふまえた表現を有機的に結びつけた解釈もまだ出されていない。

「不遇」という語句が詩題に掲げられていることは、本作品の特徴の一つと言える。

『懷風藻』には他に見られず、漢籍においても管見では董仲舒「士不遇賦」と司馬遷「悲士不遇賦」、そしてこれら二首に感銘を受けて作られた陶淵明「感士不遇賦」²しか見出せない。

このことから、釋清潭『懷風藻新釈』が「例の少なき題目なり」と指摘するように、「不遇」という語句を詩題として掲げることが特殊であるように思われる。そのような語句を共有していることから、宇合がこれら三作品に触発された可能性は考えられる。しかし、清廉潔白な人物が受け入れられない俗世に対する憤りや嘆きと、自らの処世に対する抱負で構成される三作品に対して、宇合作品では特段自らの抱負が表明されているようには見えない。また、列挙される歴史上の人物例もすべて異なっており、同じ「不遇」を詩題に掲げていても、漢籍三作品が宇合作品の直接の典拠になっただけには思われない。

ただ、この三作品において注意されるのは、董仲舒、司馬遷、陶淵明が自身の不遇あるいはそれに対する個人的な心情の吐露に終止しているのではないという点である。「不遇」は大陸の知識人における重要なテーマの一つである。これら三作品は、「不遇」に対する解釈を歴史的視座から定め、自分なりに「不遇」という現象を位置づけようとする試みではないかと考えられる。

宇合作品もまた、自分自身の不遇の主張や特定の誰かの不遇の代弁ではなく、日本の知識人としての自負にもとづく、「不遇」というテーマに対する挑戦なのではないだろうか。本稿では、本作品を、宇合が漢籍における不遇と賢者をめぐる言説を受容しながら、不遇という問題を通して賢者としての生き方を論じたものとして捉え直すことを試みる。

二、解釈上の問題点

この作品に対しては、従来、「徹頭徹尾、自他古今共に不明なり」(釋清潭『懷風藻新釈』)を初めとして、故事の羅列は認められるが詩全体としての構成や意味が分かりにくいという評価が下されてきた。用いられる故事一つ一つの典拠はすでに指摘されているが、それらが連結することによりどのような文脈を構成しているのかについては明確な説明がなされているとは言えない。

冒頭二句において、年が暮れることを悲しむ賢者と、日々新しく進化していくことを期待する明君とが描き出される。賢者が不遇のまま無為に時ばかり過ぎ去ることを嘆く一方で、明君は賢者を見出し前進していくことを願うと言う。

第三句目以降、第一〇句にかけて漢籍の故事が列挙されている。

まず、第三・四句では、第一・二句を受け、そのような賢者と明君が出会った幸運な例として、周文王と太公望そして殷武丁と傳説それぞれの出会いを挙げる。

第五・六句は『莊子』を典拠としながら、大きく飛翔する鳥の翼は同じではなく、江湖に解放され互いの存在を忘れて泳いでいる魚の鱗は区別がつかないと言う。

第七・八句は他国で捕虜になった二人の故事を挙げる。第七句では、晋の捕虜となつても楚の冠を被り続け、楚の曲を奏でた楚人鍾儀（『春秋左氏伝』成公九年）を、第八句では、匈奴の捕虜となり再三降伏するよう促されても漢の節を握りしめ投降することのなかつた漢人蘇武（『漢書』蘇武伝）をそれぞれ掲げている。

第九・一〇句では学と年齢に関する故事をもつ二人を挙げる。第九句では、四万文字を暗誦したと豪語した東方朔（『漢書』東方朔伝）を挙げ、その東方朔に匹敵する学問を身に付けたことを言い、第一〇句では、「我五十にして当に富貴なるべし」と宣言しその通りになった朱買臣（『漢書』朱買臣伝）を挙げ、年齢は朱買臣を超えたことを言う。

末尾二句においては、「二毛」つまり白髪が目立つ頭になるほど老いているにも関わらず、万巻の書を前にして貧しいままである境遇を述べる。

このように見てくると、この詩は、冒頭二句と末尾二句が時の経過すなわち老という点で呼応し合い、その間に二句一組となつた故事が列挙されるという構成をとっていることがわかる。そして、これらの故事は一つ一つ単独で見た時には、その意味内容に特段不明瞭な点はない。しかし、作品全体として考えようとすると、これらの故事がどのような機能を果たしながらどのような文脈を構成しているのかが分かりにくくなる。

第三・四句の太公望と傳説の故事は、賢者と明君との邂逅の例として掲げられていると読み取れる。また、第九・一〇句の東方朔と朱買臣は、学問を十分に身に付け、年齢も重ねたことを示しており、「万巻」の書を読む老人を描く末尾二句に連結していくことは明らかである。

しかし、第五・六句の莊子を典拠とした二つの表現、すなわち飛翔すれば翼が異なる鳥と、お互いを忘れて泳ぐ鱗が同じ魚とは、賢者と明君の関係を描く冒頭四句とどのような意味を持って連結しているのだろうか。難解である。諸注釈も、「人生觀が寓されている」（澤田総清『懐風藻註釈』）、翼が同じな

のは「遇不遇」であり鱗を異にするのは「運命」である（世良亮一『懷風藻評釈』）、「高位に栄達するには非才の及ぶ所ではないが、忘形の交を結ぶ心友を得ることは不可能ではない」（杉本行夫『懷風藻』）、「高低賢愚、色色」だから「助け合わねばならぬ」（林古溪『懷風藻新註』）など実に様々な解釈を施している。小島憲之『大系』では、第五句は「同じ人の中にも世に挙げられるものもあり、自分のように挙げられない不遇の者もあって、一様ではない」とされ、第六句については「ここでは単に莊子の語句を利用しただけであって、用いられずに人に忘れられるのは運命であり、この点は誰も同じだ」とすべきとされ、典拠となった莊子の文脈は関係ないという見解を示すに至っている。

また、第七・八句の捕虜の故事についても、莊子を典拠とした鳥や魚の話からの連結、そして東方朔や朱買臣の故事を典拠とした老と貧への展開が、どのような論理性を持ってなされているのか、難解である。従来は、宇合に「奉西海道節度使之作」詩があることを根拠として、陸奥海道西海道への従事に対する宇合自身の不遇感が表明された句だとされてきた。しかし、宇合は陸奥海道へは持節大將軍、西海道へは節度使という言葉が指揮者として出征し、どちらも捕虜になるどころか十分

な軍功を挙げて無事帰京している。そのような宇合と二人の捕虜との間に、境遇の類似性が本当に見出されるのであろうか。また、たとえ宇合の不遇感の表明と捉えたとしても、前二句との論理的整合性が見出しにくい。

このように、列挙される故事一つ一つの典拠については明らかにされていても、それらの有機的な連結と論理的な展開および作品全体における表現上の役割については適切な説明がなされていない。以下、この点について検討していくことにする。

三、「賢者」と「不遇」

古来、漢籍においては、「賢不肖」と「遇不遇」とはセットで論じられる問題であった。

例えば次のような例が挙げられる。

①夫れ遇不遇は時なり。賢不肖は材なり。君子は博く学び深く謀るも、時に遇はざる者多し。是に由りて之を觀れば、世に遇はざる者衆し。…夫れ賢と不肖は材なり。為すと為さざるは人なり。遇と不遇は時なり。死生は命なり。

今其の人有るも、其の時に遇はざれば、賢と雖も、其れ能く行はんや。苟も其の時に遇へば、何の難きことか之れ有らん。故に君子は博く学び深く謀り、身を脩めて行ひを端し、以て其の時を俟つ。(『荀子』宥坐篇)

②操行には常賢有るも、仕宦には常遇無し。賢不賢は才なり。遇不遇は時なり。才高く行潔きも、以の必ず尊貴なるを保すべからず。能薄く操濁るも、以の必ず卑賤なるを保すべからず。或いは高才潔行にして、遇はざれば退けられて下流に在り。薄能濁操なるも、遇へば進みて衆上に在り。…進むは遇ふに在り、退けらるるは遇はざるに在り。尊に処り頭に居るも未だ必ずしも賢ならず、遇へばなり。卑に位し下に在るも、未だ必ずしも愚ならず、遇はざればなり。(『論衡』逢遇篇)

①『荀子』宥坐篇は、善を為す孔子がなにゆえ世に見出されないのかという子路の疑問に対して、孔子が答えた言葉の一節である。ここには、賢不肖は資質の問題だが、遇不遇は時の問題であり、相関関係にあるのではないことが説明されている。この一節は、『孔子家語』在厄篇、『韓詩外伝』卷七、『說苑』雜言篇においても同様に、善を為す者の不遇を疑問に思う子路

に対する孔子の回答として、「遇不遇は時なり、賢不肖は才なり」(『孔子家語』)、「賢不肖は材なり、遇不遇は時なり」(『韓詩外伝』)、「賢不肖は才なり…遇不遇は時なり」(『說苑』)というように、少し形を変えながら繰り返し表れる。

②は『論衡』逢遇篇の冒頭部である。遇不遇は時によるものであり、その人の才能の有無とは関係ないことを述べている。また、『論衡』逢遇篇の末尾近くでは、「賢不肖は予め知るべきも、遇ふは先に凶り難し」というように、賢と不肖とは予め区別できるが、遇はいつ訪れるか分からず時運に委ねるしかないものだともしている。さらに、それに引き続いて次のような論を展開する。

世俗の議に曰く、「賢人は遇ふべく、遇はざるは亦自ら其の咎なり。生まれて世を希ひ主に准じ、觀鑒して内に治め、能を調べて説を定め、審に際会を伺ひ、能を進めて補有らば、則ち士の何の不遇か之れ有らん」と。夫れ遇は能予め設けず、説宿じめ具へず、邂逅して喜び逢ひ、上の意に遭触す、故に之を遇と謂ふ。主に准じ説を調へ、以て尊貴を取るが如きは、是れ名づけて揣と為し、名づけて遇と曰はず。春種して穀生じ、秋刈りて穀取まり、物を求め

て物を得、事を作して事成るは、名づけて遇と為さず。求めずして自ら至り、作さずして自ら成る、是れ名づけて遇と為す。猶ほ遺を塗に拾ひ、棄を野に披ふが如し。天授けて地生じ、鬼助け神輔け、禽息の精の陰薦し、鮑叔の魂の默拳せしが若く、是の若き者は、乃ち遇と為すのみ。今俗人、既に遇と不遇との論を定むる能はず、又遇に就きて之を誉め、不遇に因りて之を毀つ。是れ見効に拠りて成事を案じ、操を量り才能を審かにする能はざるなり。

賢であれば不遇に陥るはずがない、つまり遇不遇は賢不肖で決まるとする世俗に対して、王充は遇不遇は賢か不肖かに左右される問題ではなく、賢者としての自分が見出される時にめぐり遇えるか否かで決まるということを主張している。

これらの漢籍における議論によれば、賢不肖と遇不遇とは、質と時というそれぞれ異なる論理で決定される、非対称的な概念なのである。

宇合詩の冒頭で、賢者が時の経過を嘆くのは、遇不遇が制御不能な時間によって決定されるということを賢者自身が知っているからだろう。不遇とは、時にめぐり遇えないという意識を抱く賢者にとっての問題であり、それを悲しむことができるの

は、己の賢を以てしても時がコントロールできないことを自覚しているからである。換言すれば、不遇は賢であることを自負する者が抱える問題意識だということになるだろう。不遇をテーマとして掲げた当該詩の冒頭に賢者が登場するのはそのためではないかと考えられる。

四、賢者と明君——その出会いの奇跡——

そのような賢者とは対照的に、明君は時間の経過に期待をする。「日新」は、『文選』張華「勵志賦」に「進徳修業、暉光日新」、陸士衡「文賦」に「被金石而徳広、流管弦而日新」などと用いられ、いずれも李善注によって『周易』繫辞の「日新之謂盛徳」と結びつけられ、日々徳を新たにしていくことと理解されている。そして、「賢を信じて之を任ずるは君の明なり」(『呂氏春秋』・『芸文類聚』・『初学記』)とあるように、賢者を見出すのは明君の役割とされる。そして、その賢者の輔佐によって日々自らの徳を新たにしていくなかで明君だという。このような明君にとっては、時の経過は自らの進化と刷新を意味する。したがって明君は時の経過を悲しまず、恐れな

詩冒頭で提示される賢者と明君とは、時の進行に対する捉え方が対照的である。賢者が人知を超えた制御不能なものとして時間を捉え、過ぎゆくのを見つめるしかないと考ええるのに対して、明君は時間の経過を己の成長に換えてゆこうとする。時の経過に対してネガティブな賢者とポジティブな明君、両者は物理的には同じ時間の流れる現実世界に存在しながら、まったく逆方向の時間認識の中で生きている。

遇不遇が時に決定されるという前提に立てば、賢者にとつて明君との出会いは、求めて得られるものではなく、偶然訪れる僥倖である。その例が、第三句と第四句で挙げられる太公望と傳説の故事である。

太公望については『史記』齊太公世家に、狩獵前の「卜」で「霸王の輔」を獲るとの結果を得た周文王が、果たして渭の陽で釣りをしていた太公望と出会い、車に「載」せて帰ったとされている。傳説については『史記』殷本紀に、殷武丁が「説」という名の聖人を得るといふ「夢」を見て、果たして土木工事をしている百工の中から見出したとされている。これらの故事にもとづいているのが第三・四句「周日載逸老 殷夢得伊人」である。

第三句二文字目「日」は群書類従のみ「占」字になっている

が、これは不忍文庫本の屋代弘賢による書入「占カ」が採用されたのだろう³⁾。諸本「日」字であり「占」字となっている本文はないが、弘賢は故事の内容から「占」字の誤りではないかと考えたと思われる。しかし、さらに故事に厳密に即すならば、『史記』原文にある「卜」字がより相応しいのではないか。草書体になると「卜」と「日」とは、「占」と「日」以上に区別がつきにくくなる。また、後代のものになるが「殷夢周卜謁誠待賢」（宣宗「授蕭鄴平章事制」）、「故周卜帝師得諸渭水、殷夢賢佐求傳巖」（僖宗「授韋昭度平章事制」）など、「周卜」が太公望発見を表す語句として「殷夢」と対で用いられる例が見られる。二例とも九世紀後半のものであり、宇合がこれらの資料を参看することは不可能だが、発想や表現の型として漢籍においてはそれ以前から存在していた可能性はある。もともと「周卜」とあったものが書写の過程で字が崩れ、「周日」と誤読されて伝えられたのではないかと考えられる。

「卜」「夢」を契機として遂げられたこれら二件の賢者と明君の出会いは、遅くとも七世紀には奇跡の遇を表す例として類型化されていたようである。『貞観政要』では、「豈に傳説を夢み、呂尚に逢ふを待ちて、然る後に政を為さんや」（論撰官第七）、「豈に傳説を夢み、呂尚に逢ふを待ちて、然る後に治を為

さんや」(論仁義第一三)の二箇所に、明君と賢者の奇跡の出会いとしてこの二例が対になって示される。それぞれ発話者は異なるが、いずれも、それら二例のような僥倖を待つのではなく、明君側が積極的に賢者を自ら捜し出すことの重要性を説く文脈で用いられている。

字合詩においても、冒頭で示された、賢者の遇不遇を決定するのは制御不能な時間であるとの認識を受け、卜と夢という人知を超えた力によってもたらされた二つのめぐりあいが見出されていると考えられる。

五、賢者と俗人—その飛翔力の差異—

賢者は、ひとたびその偶然的奇跡によって見出されれば、太公望や傳説のように、俗人との才能の違いを見せつける。しかし、見出されないままであれば、その才能は埋没したまま俗人との違いも分からない。そのことを表すのが莊子を典拠とする第五・六句なのではないだろうか。

第五句は、『莊子』逍遙遊篇の鵬の故事にもとづいている。

この故事では、何千里あるか分からない背中と天を覆う翼を持つ鵬の飛翔が描かれる。鵬は、「海運けば則ち將南冥に徙らん

と」して、その翼で三千里の彼方まで海水を撃ち、つむじ風を「搏」って九万里の上空まで飛翔する。その鵬のことを、飛んでもせいぜい梢にしか到達しない蝸と学鳩は、「奚を以てか九万里に之きて南するを為さん」と言って嘲笑する。それに対して莊子は「小知は大知に及ばず」とし、蝸と学鳩のような俗人の知では、鵬のように俗世を超越して生きる者の知は理解不能だという。

「搏拏不同翼」という第五句は、飛び立った鵬が、蝸や学鳩との間に飛翔力の差を見せつけたように、賢者がひとたび見出されれば、俗人との間にその資質の差を見せつけるということではないだろうか。その飛翔力は、蝸と学鳩のような俗人のものとは桁が違い、彼らの理解を遥かに超えた高さまで飛び立つ。明君と出会った賢者は、太公望や傳説のように、その才能を発揮し、俗人との資質の違いを際立たせるというのである。

そして、第六句の典拠とされるのは、『莊子』大宗師篇と天運篇の二箇所に見られる「泉涸れて魚相与に陸に処れば、相啣するに湿を以てし、相濡するに沫を以てするも、江湖に相忘るるに如かず」という表現である。

第六句「相忘」の語句が依拠する後半部分「江湖に相忘るる」状態は、魚が川や湖でお互いの存在を忘れて泳いでいる状

況を表している。莊子では、泉が涸れて魚が互いに泡をかけあい湿気を与え合って助け合わねばならないような状況よりも、魚が自由気ままに泳いでいる状況の方が理想的だとされている。さらに「相忘」とセットで莊子のこのような思想を象徴する「江湖」という語句は、「真の解放を楽しむ自由な空間」をイメージする詩語としても確立されていくとされる。⁴「江湖に相忘るる」とは、お互いの存在を意識することも、互助の精神を発揮することも必要とされず、自由に解放されて泳いでいられる平穩無事な状況にあることを表している。

第六句目は、そのような状況下では魚の鱗は異ならない、つまり魚同士の区別がつかないという。これは、自由で平和な状況下にあるときは、魚同士の資質の違いすなわち賢不肖の差異は明らかにならないということなのではないだろうか。特に不如意なことない開放的な状況においては、賢者の資質は發揮されることもなく、凡に混じり埋没していくのである。そうだとすれば、賢者のすぐれた資質が發揮されるのは、窮地に陥った状況下においてなのだということになる。莊子で言うところの、泉がかれて陸にいる魚のように、不自由で苦しい境地に置かれた時にこそ、賢者の本当の資質が發揮されるということになる。

東方朔「答客難」(『文選』)に次のような一節がある。

今は則ち然らず。聖帝徳は流り、天下は震懼し、諸侯は賓服し、四海の外を連ねて以て帯と爲し、覆盂より安し。天下は平均し、合して一家と爲り、動発して事を挙ぐるや、猶ほ之を掌に運らすがごとし。賢と不肖と、何を以て異ならんや。：蘇秦張儀をして、僕と今の世に並び生かしめば、曾と掌故をも得ざらん。安んぞ敢えて侍郎を望まんや。佞に曰く、天下害無ければ、聖人有りと雖も、才を施す所無し。上下和同すれば、賢者有りと雖も、功を立つる所無しと。

これは、学問に通曉しているにも関わらず官位が低いのは東方朔自身に欠点があるからと尋ねた客に対して、東方朔が答えた言葉の一節である。東方朔は、天下が安らかに治まっている状況にある現在においては、賢者は力を發揮しようがないのだと言う。周王室の崩壊を背景として活躍した張儀や蘇秦のように、世の中の均衡が破れ、不安定で荒廃した状況に陥った時にこそ、賢者はその才能を發揮し、不肖との違いを見せつけるのだとする。

宇合詩は、この東方朔の言葉に表れる、不安定な困窮状態において初めて賢不肖の力の差が際だつという考え方を踏まえているのではないだろうか。東方朔は、第九句にも用いられる。宇合は、東方朔の言葉を踏まえながら、莊子の表現を使つて第六句を創作したのではないかと思われる。

六、賢者の真価——鍾儀と蘇武——

窮地に陥つた状況下で、賢者の資質はどのように發揮されるのか。その例として掲げられるのが第七・八句の鍾儀と蘇武の故事である。

第七句の典拠となるのは『春秋左氏伝』成公九年の鍾儀の故事である。

晋に捕らえられた楚人鍾儀は、牢獄の中で「南冠」つまり楚の冠をつけたまま繋がれていた。その鍾儀の縄を解かせた晋公は、鍾儀に対して家柄を尋ねた。鍾儀が「冷人なり」と答えると、晋公は「能く楽せんか」と問うた。鍾儀は「先父の職官なり、敢えて二事有らんや」と言い、与えられた琴で「南音」つまり楚の曲を奏でた。さらに晋公が楚の君王について尋ねると、鍾儀は楚王の皇太子時代のふるまいについて答えた。その

ような鍾儀を、范文子は「楚の囚は君子なり。言先職を称するは、本に背かざるなり。寒土風を操るは、旧を忘れざるなり。大子を称するは、抑抑私無きなり。其の二卿に名いうは、君を尊ぶなり。本に背かざるは、仁なり。旧を忘れざるは、信なり。私無きは、忠なり。君を尊ぶは、敏なり」と言つて称賛し、鍾儀を楚に帰して和睦を結ばせることを晋公に勧めた。その結果、鍾儀は礼遇され帰国が叶つたという。

この故事によって成立した「南冠」「楚奏」の語句は、「北風尚嘶馬 南冠独不帰（江綵「遇長安使寄裴尚書詩」『芸文類聚』、「鍾儀幽而楚奏兮、莊舄顯而越吟」（王粲「登樓賦」『文選』）など故国に戻れない境遇に対する悲しみを表すものとして用いられ、初唐には駱賓王が「自応迷北叟 誰肯問南冠」（憲台出繫寒夜有懷）、「寂寥傷楚奏 淒斷泣秦声 秦声懷故里 楚奏悲無已」（在江南贈宋五之問）など、志の果たせぬまま異郷で不遇をかこつ悲しみを表すものとして比較的多く用いている。これらは、主に自らの意思に反して異国に抑留される境遇とそれに対する悲嘆とに焦点が当てられており、消極的なベクトルでの表現となつているように思われる。おそらく詩語として継承される中でそのようなイメージが定着したのであろう。

しかし、もともとの故事の中心は、虜囚鍾儀の嘆きや悲しみではなく、どのような境遇にあつても自らの志操を忘れない強さを描くことにあるのではないだろうか。南冠も楚奏も自らの節操を堅持する精神によつてとられる行動であり、晋公に対する返答も自らのあるべき立場を貫く意識による発言である。捕虜となりながら、自らの生殺与奪を握る権力に対しておもねることも、巧言を弄することもしない。鍾儀は、逆境にありながら不変の節操を貫こうとする強い意志を秘めているのである。范文子の鍾儀への称賛は、まさにこの操守堅正する高潔さに対してなされている。

第八句の蘇武の故事もまた、鍾儀の故事と同様に、窮地に陥つても自らの志操を変えなかつた蘇武の資質を描くところに中心がある。

蘇武は漢武帝の使者として漢の「節」を持って匈奴に派遣されるが、部下が單于への謀反に荷担した咎で捕らえられる。その蘇武に対して、漢から匈奴に降つていった衛律が、降伏した暁には單于の大意が施されることを説き、降伏を強く勧めるが、蘇武はそのような律を罵倒し、降伏を拒絶した。どのような目にあつても屈服しようとしないう蘇武は北海のほとりに送られた。飢えに苦しんだ蘇武は、野鼠や草の実を食べて凌ぎなが

ら、「漢節」を杖として課せられた羊の放牧に努めた。蘇武が手放さなかつた「漢節」はとうとうその旄が全て抜け落ちてしまった。一〇年ほど経つた頃、李陵が降伏の説得に訪れた。蘇武にとつても漢に仕えた親友の李陵は、すでに匈奴に降伏していた。降伏するよう説得する李陵に対し、蘇武はその勧めを拒絶し、生命を賭して自らの主君への忠義を貫く意志を告げる。李陵は蘇武の高潔さに感嘆し、翻つて簡単に漢を裏切つた自分の行為を恥じ入る。そして、約一九年間におよぶ抑留生活の末に、匈奴と漢との和睦によつて蘇武は帰国を果たす。

この故事では、異国で囚われの身となり寒さと飢えに苦しみながら、再三の降伏の勧告を拒絶し、漢の武帝の使者としての忠義を貫いた蘇武の節操の高さが語られている。ただ単に辺境の地で辛酸をなめたというエピソードではなく、どんな困難に直面しても志操を曲げることのなかつた蘇武の高潔ぶりを描くところにこの故事の眼目はある。

これら二つの故事の共通点は、二人がともに逆境にあつて自らの志操を曲げなかつたことである。平穩無事な日常においては、ぎりぎりの選択を迫られる局面はあまりない。しかし、生命の危険を冒されるような非常事態に直面した時には、自らのふるまいに対する決断を下す必要が生じる。李陵や律衛のよう

に現状に迎合することで当面の苦しみや不自由さから逃れるのか、蘇武あるいは鍾儀のように自らの信念や志を貫くのか。この決断に、その人の資質が表れる。「相忘」して泳げる平和な「江湖」よりも、水が涸れて生命の危機にさらされる困窮状態の方が、人間の資質の相違が際だちやすい。鍾儀と蘇武という二人の賢者の真価は、虜囚という立場に置かれることで発揮されたのである。

このような故事にもとづいて構成された第七・八句は、「相忘」に象徴される自由で開放的な状況下では賢者の資質は際だたないという第六句を受け、窮地に追い込まれた時にその資質を発揮する賢者の姿を描いているのではないだろうか。不如意な状況下に置かれた時にこそ、賢者の真価は初めて際だってくるのである。

困窮状態の中でこそ真価が現れるというこの考えは、『論語』子罕篇の「子曰く、歳寒くして、然る後に松柏の影むに後るることを知る」と共通している。宇合は「在常陸贈倭判官留在京」詩において、この論語を典拠とした「然而、歳寒後驗松竹之貞」(詩序)、「為期不怕風霜触 猶似巖心松柏堅」(詩本文)という詩句を作っている。厳しい状況においてこそその真の力すなわち節操の高さを発揮するのが賢者であるという考え

は、官人機構という俗世のまっただ中で生きる宇合にとって、「知」とは何かをめぐる思索の帰結であったのだろうか。

七、賢者の貧

宇合詩の第九句以降末尾にかけて、膨大な学識を抱えながら貧をかこつ賢者の姿が描かれる。不遇が自分の力ではどうしようもない「時」によって決定されるものだとこのことを知っているこの賢者は、時の進捗とともに年齢を重ね、不遇という不如意な境遇の中で、変わらぬ節操を保って学問に励んできたのである。東方朔に匹敵する高い学識と、朱買臣を超えた年齢とは、この賢者が賢者として生きてきた結果である。宇合詩は、この学識と老いのほかに、末句において貧という要素を付け加えている。これは、貧は賢者として生きたことの証であるという認識にもとづいていのではないだろうか。

『論衡』定賢篇に、「仕宦して高官を得、身富貴なるを以て賢と為さんや。則ち富貴は天明なり。命富貴なるは賢の為ならず、命貧賤なるは不肖のためならず」とあるように、賢不肖と遇不遇とは非対称的な関係にあるという考えのもとでは、賢者が必ずしも富貴に恵まれるとは限らないことになる。

また、賢者の真価が困窮状態の中でこそ發揮されるとすれば、困窮状態の一つである貧という境遇は、賢者としての生き方と矛盾しないことになる。貧という逆境の中で己の真価を發揮するのが賢者としての証ということになるからだ。

さらに、貧という困窮状態を、賢者の避けられない宿命として捉えた中国知識人に陶淵明がいる。

「詠貧士 其の二」には、冒頭で「淒厲として歳云に暮れ褐を擁して前軒に曝す」という寒さ厳しい年末にほろをまとう姿を描き、「南圃に遺れる秀無く 枯条は北園に盈つ 壺を傾くるも余瀝絶え 竈を闕ふも煙を見ず」という四句で窮乏状態を表現する。しかし、そのような状況下でも、「詩書は座外を塞ぎ 日昃くも研むるに違あらず」というように詩経や書経などが山のように積み上げられ、読書に余念がない。そのような貧窮の中で勉学に勤しむという状況について、「閑居は陳厄に非ざるも 窃かに慍りの言に見るる有らん 何を以て吾が懐を慰めん、頼いに古より此の賢多し」というように、「論語」衛靈篇の孔子の窮乏に対して子路が慍った故事をひきあいに出しながら、古来、多くの「賢」が甘んじた境遇だったと結んでいる。ここでは、書物を山積みしながら貧窮をかこつ境遇にある「貧士」が、古来の賢者の系譜に連ねられるという形で、

「貧」と「賢」とが結びつけられている。そしてまた、この「貧士」の境遇は、宇合詩の第九句から末尾にかけて描かれる、膨大な学識を抱えたまま貧しい状態にある老いた賢者の姿と重なってくる。

この陶淵明詩にふまえられている『論語』衛靈公篇の故事は、陳の国で食糧が尽き、従者もみな疲労困憊で立つこともできなくなった時、「君子も亦た窮すること有るか」と慍りを露わにした子路に対して、孔子が「君子固より窮す、小人窮すれば斯に濫る」と答えたというものである。君子というのは困窮状態にあるものであり、その中でも凡人のように真実を見失うことなく自らの節を堅持するものだというこの孔子の言葉にある「固窮」という語を、陶淵明は六首の作品に用いて、窮乏状態を受け入れ、それに屈しないで自らの節を曲げることなく清らかに生きる志を表現している。⁵⁾ 陶淵明は論語を通して、「固窮」を君子としてあるべき理想の姿として受容し、己の隠逸を支える信念としたのではないかと思われる。そして、それは、「詠貧士 其の二」にあるような、貧窮を甘受すべき境遇と捉えた上で自らの意志を貫くことが、「賢」を備えた者の生き方であるという認識に結びついたと考えられる。

これは、陶淵明自身が理想とした賢者像だったということに

もなる。言い換えれば、陶淵明が示した「賢」に対する認識である。宇合詩末尾で描かれる、万巻の書を抱えた貧しい老賢者の姿は、このような陶淵明の示した賢者像を継承しているのではないだろうか。⁶

八、まとめ

漢籍では、遇不遇は時、賢不肖は質によってそれぞれ決定されるものであり、ゆえに不遇は己の資質を超えたところで決定される。自分の力で克服できるものなのであれば、その努力をすれば解決する。しかし、不遇はそうではない。自分の力の及ばない「時」による解決を待つしかない。不遇は、そのことを知る賢者が抱える問題意識である。古代中国知識人は、遇不遇が自分の力を超えたものによって決められることを熟知していたからこそ、その不遇にどう向き合うかを重要課題として認識したのである。

宇合は、漢籍におけるこの不遇をめぐる議論と問題意識とを十分に理解した上で、古代日本の知識人として不遇という問題を論じたのではないだろうか。詩題として掲げられた「不遇」に対する「悲」しみは、賢者としての自負を持つ者が抱えるこ

とになる感情である。宇合詩においては、不遇への悲しみは、ある特定の誰かの個人的な感情としてではなく、賢者であろうとする者が必然的に対峙することになる感情として捉えられているのである。

そのため、この詩では冒頭で賢者が登場し、詩全体にわたって典拠を踏まえながら賢者論が展開されることになる。太公望や傅説のような僥倖に巡り会った賢者は、鵬のように高く飛翔し、その才能の高さを見せつける。しかし、見出されないまま平和な日常を自由に生きている状態では、賢者の資質の違いは際立たない。賢者は、その自由が奪われ厳しい境遇に直面した時に、鍾儀や蘇武のようにその節操の高さを見せつける。逆境に負けず己の志を貫いて生きた賢者は、東方朔に匹敵する学識を備え、年はすでに朱買臣を超えた。老いを迎えた賢者は、万巻の書を抱えたまま貧しい生活をおくっている。一見、意味不明な典拠と典拠の連続には、「賢者」という一本のテーマが明確に貫かれている。

「賢者」というテーマは、律令官人として俗世の中心で生きる宇合にとつて、本当に備えるべき知とは何かをめぐる問題だったのではないだろうか。俗世では、不遇よりも遇が、貧よりも富貴が価値あるものとされ、人々は皆それらの獲得に知を

めぐらせる。しかし、漢籍に通曉していた宇合は、遇不遇が時間という賢不肖を超えたものに決定されるものであり、そのことを知っているからこそ不遇は悲しまれるのだと考えたのであろう。そして、宇合にとっての本当の知とは、その不幸な境遇と悲しみを直視しながら、自らの志を貫いていく力であった。そうした知を有する者が真の賢者であるという認識にもづいて賢者論を練り上げたのが、本作品なのではないかと考えられる。

注

- (1) 辰巳正明『万葉集と中国文学』(笠間書院、昭和六二年、四七二頁)は、「宇合が不遇であったか否かは疑わしい」とした上で、「泰西海道節度使之作」詩でも不遇感が表出されていることや、本作品の捕虜の故事を「自身の立場に置いて述べたもの」と捉える立場から、「万巻の書を読んでも依然として貧しいことを述べ、身を立てることのできないのを「不遇」と意識する宇合は、身を立てることを以って空しからざるものとする」と論じ、さらに『万葉集と比較詩学』(おうふう、平成九年、三四七―三五二頁)で、「賢者とは、まさに宇合自身のことと違わないであろう」とし、その「不遇という題が中国の士大夫たちの常とする思いでもあった」ところに宇合の不遇感が生じる契機があったことを論じている。井実充史「藤原宇合の不遇開陳の詩」(無窮会『東洋文化』復刊七五号、平成七年九月)は、「若き日に入唐して学問を修めたが、帰朝後辺境への従軍を強いられた一人の官人が、己の不遇な生涯を凝視し、内心快々たる思いを吐露した述懐詩」

と論じ、胡志昂「奈良王朝の『翰墨之宗』」(池田利夫編『野鶴群芳古代中国文学論集』笠間書院、平成一四年、六〇頁)は、「自らの才能と役職のアンバランスすなわち不遇という意識が宇合に確実にあった」と論じている。

- (2) 辰巳正明氏は前掲注(1)書および『懐風藻全註釈』(笠間書院、平成二四年)において、宇合詩の背景にこれら漢籍の不遇の詩賦があることを指摘している。また、陶淵明「感士不遇賦」を論じたものに、西岡弘「陶淵明の『感士不遇賦』について」(『國學院雑誌』五九卷一〇・十一月号、昭和三年一月)、櫻田芳樹「感士不遇賦」の材源と「固窮節」の定立」(『中国文化』研究と教育)漢文学会会報五四号、平成八年)などがある。

- (3) 不忍文庫本が屋代弘賢による校本で、群書類従本文がその校合書人をほぼそのまま取り込んだ複合本文になっていることは、拙稿「懐風藻箋註」と『懐風藻』(早稲田大学日本古典籍研究所年報)第四号、平成二三年三月)、「懐風藻」伝本および本文の諸問題」(『東京医科大学大学教養部研究紀要』第四四号、平成二六年三月)など参照。

- (4) 玉城要「江湖」(後藤秋正・松本肇編『詩語のイメージ』唐詩を読むために、東方書店、平成二二年)一一二―一二七頁。

- (5) 「固窮」については、一海知義「陶詩固窮考」(『一海知義著作集』2 陶淵明を語る、藤原書店、平成二〇年)参照。

- (6) 藤原宇合における陶淵明受容については、拙稿「陶淵明と藤原宇合―隠者による隠逸詩の創作―」(河野貴美子・張哲俊編『東アジア世界と中国文化』文学・思想にみる伝播と再創、勉誠出版、平成二四年)で論じた。

附記

本稿は科研費基盤研究C「『懐風藻』諸伝本および本文に関する研究」(課題番号二六三三〇二〇一)にもとづく研究成果の一部である。